

チョコキラオでおきたこと -Fの手記- 和訳

シバヤマが言った。チョコキラオに旅行する友達がいるんだけど一緒にどう？って。本当は一人で旅行するのが好きだった。ひとりの空間が大事だから。人と話すのが嫌いってわけじゃない。ただ、ひとりの方が旅に集中できるってだけ。

-

あの長い旅では、シバヤマの友達の2組のカップルと一緒にだった。彼らとはご飯食べたり旅程を計画する時以外は別行動だった。溢れた私は邪魔者だったと思う。勘違いかもしれないけど、私はずっとそう感じていた。まあ、客観的な現実なんて存在しないし、我々って主観で物語をつくっちゃうから彼らが本当のところどう思ってたかわからないけどね。

-

私はアンデスの山を、日本と変わらず木がたくさんあって苔が生えてるものだとイメージしていた。単純に、高山病になるんだろうなってことが憂鬱だった。なのに実際訪れてみると、日本の山の景色と全然違って、ずっとこの旅が続けばいいのに！と感動しながら歩いていた。

-

1週間の行程で一番楽しかったのは、途中の村々でゆっくり休憩することだった。時間を忘れて、子供みたいにただただそこにいることを楽しんだ。

-

あれ、時系列に沿ってちゃんと話を始めることができない・・・
広い記憶の空にいるんな出来事が浮かんでいて、それらは私の思い入れの強さによって違う大きさに現れまるで星座を作るように物語を構成している。

-

村で恵んでもらったゆで卵の黄身がめちゃくちゃ鮮やかなオレンジ色で美味しかったな
インディヘナの女性に話しかけるのは緊張したな
私たちはただへらへら微笑み合って、彼女は何度説明しても私を中国人だと思ってたな
あと、私が歌うといつも寄ってきて隣に座ったあの馬・・・
高地は乾燥していて手がどんだんがさがさしわしわになって、ひび割れていったな

-

私の母はずっと、私がおかを見つけたくて放浪してると思っていて、私はそれが居心地悪かった。彼女は私が失踪するのを恐れていたんだと思う。でも今では、私が自分を見失わない唯一の方法が放浪なんだと理解してくれたみたい。それが世界のどこであっても。といっても、私はいつも高い場所を好んでいた。そこは見晴らしが良くて、新しい場所へ移行するための出口になっている。

-

あの馬にまた会いたい